

という試みは、アマチュア研究家のなかでまず高められた。その意味でも、鉄道史研究の将来のあり方に対して、アマチュア研究家は学界の大勢よりも一歩先んじていたといえる。

一般のアマチュア研究家はもともと、経済史家や地理学者がとりあげたような鉄道資本の調達や地域社会との関連よりも、鉄道車両・施設に関心があり、現在でもその傾向は変わっていない。しかし、これからの鉄道史研究の向上には、学界側がアマチュア研究家の研究成果にもっと注目し、その成果を積極的にとり入れることが必要であろう。本書のような、学界とアマチュア研究家の接点に位置する著作についても、大いに注目され、評価・利用されてよいのではないだろうか。

(青木 栄一)

伊藤 安男 著；

「治水思想の風土——近世から現代へ——」

古今書院 1994年 3月

A 5 判 336ページ 4,738円

近年の災害研究では、その現象のメカニズム・原因・被害の把握だけでなく、防災意識や避難行動などメンタルな部分の研究も多くみられるようになってきた。しかし、本書でとりあげられた江戸期から現在に至るまでの期間において、流域の人々の洪水への対応や意識を歴史地理学的方法で明らかにしようとする研究の例はあまり多くない。

本書は、前述のような歴史地理学的方法で治水思想までも浮き彫りにしようとしている点に特徴がある。著者も述べているように、地域の災害についての特性を理解し、それを行政に活かすことができれば、研究面だけでなく応用面でも本書のもつ意義は大きいといえよう。本書には、日本の洪水常襲地域の一つである輪中地域に住み、30年以上にも及ぶ研究を続けてきた著者ならではの視点から、丹念な研究を行なった結果が随所にあらわれている。さらに、全体を通してみると、徹底した実証研究が展開されている点も大きな特徴といえる。

本書は、第一部「洪水と囲堤集落」、第二部「明治期の治水思想」、第三部「江戸期の災害と住民対応」、第四部「輪中地域における水意識」から成っている。そこでまず、部ごとに主な内容を紹介してみよう。

第一部は、「囲堤集落とその分布」「九頭竜川流域」

「信濃川中流域」「円山川流域」「利根川水系小貝川流域」「中国広東省珠江デルタ」の六つの章より成り、各地にみられる囲堤集落について論じたものである。著者は、輪中地域以外にみられる囲堤をも一般に輪中と称されることに疑問をもち、むしろそのような集落は囲堤集落というべきであると提言している。その理由として、輪中という用語が木曾三川の輪中地域以外では慣用されないこと、輪中地域でも場所・時代によってそれ以外の用語が用いられること、景観だけでなくその内部構造をも含めて規定すべきことなどをあげている。そこで著者は、第一章で囲堤集落の定義づけを、以下に行なっている。まず、囲堤をもつ集落であって、水防組織があり、それを紐帯とした運命共同体的な水防社会を形成している。さらに、隣接する共同体との間に水論が存在することや、水屋・水塚・段蔵などの建築物があることも、その定義に含めている。その上で、輪中地域を除く前述の五地域を、囲堤集落がみられる地域としてとりあげ、その特徴を述べている。例えば、第六章の「中国広東省珠江デルタ」では、囲堤である基田の分布とともに、輪中地域とよく似た土地利用景観がみられることにも触れている。

第二部は、「蘭人工師たちの治水観」「木曾川改修をめぐる治水思想——とくに蘭人工師来日を中心に——」の二つの章より成る。明治政府は、欧米の進んだ科学技術を導入するために、多くのお雇い外国人を招聘した。河川改修などの土木工事は主にオランダ人の土木技師の指導によって実施され、当初、低水工法が採用されてきた。その後、明治中期以降、連続堤を築造する高水工法への転換が行なわれるようになり、土木行政の大きな転換期をむかえた。このような状況の中、お雇い外国人の中でもとりわけ長い期間（約30年）にわたって滞りし、土木技術の指導を行なったオランダ人がいた。それがヨハネス・デレーケである。著者は、オランダの土木技師たちの治水観が単なる河川改修だけでなく、治山事業をも含んだ上で形成されていることに注目した。そこで著者は、淀川河畔にある建設省淀川資料館にある文書や、デレーケの指導による工事の跡を丹念に追っている。そうして、明治期のビッグプロジェクトである木曾川改修工事の着工にいたるまでの前史に焦点をあてることで、オランダ人の土木技師たちの治水観を克明に説明している。

第三部は、「破堤地の切所池・押堀」「土石流常襲

地とその住民」の二つの章より成る。押堀（おっほり）は、洪水の破堤に伴って形成された切所池であり、現在でも堤防沿いの堤内地に点在している。押堀の部分の危険性は多くの史料にも示されており、江戸期の人々も認識していた。この事実は、最近の破堤の例でも証明された。昭和51（1976）年9月の安八輪中の破堤では、押堀の存在が破堤の原因とされ、その後の訴訟の最大の争点となった。第一章では、江戸期の人々が押堀付近でくり返される破堤と、それとともに起こる大量の土砂の流入という災害に対し、どのような対応をしてきたかが示されている。破堤地の修復を行なう場合、押堀の部分を大きく迂回して新しい堤防を築造するなどしているケースが多い。このため、たとえ現在その押堀が既に埋め立てられていたとしても、古地図などから押堀の復原は容易であるという。また、第二章では、養老山地と木曾谷でおこった土石流の災害と、その対応について述べている。例えば、江戸期に養老山地からの土石流が直接、揖斐川に流入し狭窄部を形成するなどして、これが上流と下流の深刻な水論に発展するのである。なお、この養老山地の土石流災害の防止は江戸期には解決されず、明治期になってデレークの指導を受けて、本格的な工事が行なわれている。

第四部は、「輪中と輪中地域」「輪中地域とその防災意識——九・一二災害後の意識変化を中心に——」「輪中の城下町の立地環境」の三つの章より成る。輪中地域には、特有な水意識が存在する。それは輪中根性と呼ばれ、一般的には排他的な地域エゴのように解釈されている。しかし、著者は必ずしもそうばかりとはいえないとして、その実態にいろいろな角度から迫っている。著者は、輪中根性は輪中意識であり、輪中意識とは水防意識であり防災意識であるという。また、アンケート調査の結果から水意識の違いを求め、地域の変化が大きいところほど、輪中根性が稀薄であることを明らかにし、結果として災害につながったとみている。最後に、輪中地域に立地する二つの城下町の立地環境を比較し、そのきわだつ違いに輪中地域の先住権を優先する慣習をみたとしている。

以上、主な内容を紹介させていただいたが、青木伸好との共著『輪中』（学生社、1979年）とをあわせ

読むことで、本書の内容はいっそう理解しやすくなるであろう。

本書には、多くの明快な図表・写真が掲載されており、親切的な配慮がなされている。また、文章も明確で歯切れがよい。その意味で、著者の意図するところは読者に十分に伝わるであろう。

全体の構成をみると、本書の目的からして、各部・各章の内容に違和感はない。本書がこれまでに発表された論文などの集大成であることを考慮すればやむを得ないことかも知れないが、ボリューム・形式などの点で今一つの統一性があってもよかったのではないだろうか。

本書は、一般の読者や行政にたずさわる人々にも読んでいただきたい内容をもつものであり、その点からすればこの構成・内容で目的は達せられる。しかし、一方で歴史地理学的な学術書であるので、最初の部分において研究史や研究上の問題点の整理を行なう章があってもよかったと考える。

以上の二点が、全体の構成からすると多少気になったところである。

著者は、本書の中で以下のように述べている。「治水は計画者、為政者が河川をどのように扱うかという立場で考えられるものである。一方の水防は、自らをどう守るかというものであり、こうしたある面の矛盾を解決しようとするのが治水の進展であった。」水防を強く意識するならば、まさに輪中根性をもたねばならない。反対に、行政による治水事業が大規模に行われれば、輪中根性が稀薄になる。極端な場合には、それが災害に直結することになることは本書でも明らかにされた。この治水・水防という二つの概念が互いに深く関わりあい、歴史的に錯綜してきたことは間違いない。著者は、本書の中で、このような二つの概念の関わりあいとその過程を明確に浮き彫りにしようと努め、その結果を提示してきた。この試みは成功しており、その意味で本書は評価されよう。

今後、災害研究の中でも、工学や社会心理学的な研究だけでなく、この種の研究が増えることを期待したい。

（吉越 昭久）